



草花は、枇杷と並ぶ南房総市の特産品。道の駅も年間を通して花に囲まれ、訪れる人々の目を楽しませる



初来日し、千葉県内の道の駅を視察するビンアン村の研修員。陳列方法など商品のより良い「見せ方」についても学んだ

そんな加藤さんは、道の駅を「地域を映す鏡」とも表現する。道の駅で人々が生き生きと働いている姿こそ、地域全体が活力に満ちている証しだからだ。地元を誰よりも愛し、道の駅とともに12年間奔走してきた加藤さん。その挑戦は、ベトナムの地でも続けられている。

そんな加藤さんは、道の駅を「地域を映す鏡」とも表現する。道の駅で人々が生き生きと働いている姿こそ、地域全体が活力に満ちている証しだからだ。地元を誰よりも愛し、道の駅とともに12年間奔走してきた加藤さん。その挑戦は、ベトナムの地でも続けられている。

「とみうら枇杷倶楽部」のある旧富浦町（06年に南房総市に合併）は房総半島南西部に位置し、枇杷や草花などを特産品とする人口約5700人の地域。1970年代までは海水浴客などにぎわっていたが徐々に過疎化が進み、90年代初

頭には農産物の輸入自由化やバブル経済の崩壊の影響で、農業や観光業といった基幹産業が衰退する。そうした状況の打開策として期待されたのが「とみうら枇杷倶楽部」。道行く人々の「休憩施設」、歴史や文化、観光情報などを伝える「情報発信基地」としてだけでなく、地元の人々が作る特産品の販売などを通じた「地域振興の拠点」として、地元を挙げて設置に取り組んだ。そして、この千葉県初の試みの指揮を執ったのが、駅長の加藤さんだった。

92年にオープンしてからすぐに取りかかったのが、市場には出せず廃棄していた、出荷規格外の枇杷を加工した商品の開発だ。ジャムやソフトクリーム、健康茶といった40品目以上のアイデア製品を次々と作り出し、地元の人をはじめ、県外からも人気を集めた。また旅行会社とともに、農業体験や民宿での食事などを組み合わせたバスツアーを企画するなどして、多くの観光客を呼び込むことに

成功。さらに、観光ポータルサイトを立ち上げて南房総の観光情報を発信するなど、地元の農家や商店、観光関連の事業者などを巻き込んだ地域振興に取り組んできた。そうした地道な努力が実を結び、かつては年間20万人にまで落ち込んだ旧富浦町の訪問者が100万人を超え、「とみうら枇杷倶楽部」の年商も6億円に達するなど、地域全体の活性化に大きく貢献した。04年には、地元を根を張った長年の活動が評価され、国土交通省が認定する「観光カリスマ百選」にも選ばれた。

「大切なのは施設を設けることよりも、地域振興のための機能。そして地域住民が、自分たちの誇りと感じられる場を作り出すこと。『とみうら枇杷倶楽部』で私たちが何より重視してきたその心を持ち続けられれば、きつとうまくいくはずですよ」

成功。さらに、観光ポータルサイトを立ち上げて南房総の観光情報を発信するなど、地元の農家や商店、観光関連の事業者などを巻き込んだ地域振興に取り組んできた。そうした地道な努力が実を結び、かつては年間20万人にまで落ち込んだ旧富浦町の訪問者が100万人を超え、「とみうら枇杷倶楽部」の年商も6億円に達するなど、地域全体の活性化に大きく貢献した。04年には、地元を根を張った長年の活動が評価され、国土交通省が認定する「観光カリスマ百選」にも選ばれた。

ビンアン村近郊の市場で売られる花や野菜。品質保持と食の安全、農民所得の向上のためにも、今後は道の駅を拠点とした販路の拡大が求められる

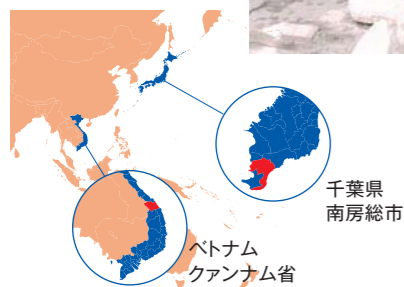


かとう・ふみお

1950年千葉県生まれ。高校卒業後、安房郡富浦町（現南房総市）役場に就職。91年観光企画課長、92年道の駅「とみうら枇杷倶楽部」駅長、2003年富浦町役場総務課長。道の駅での功績が認められ、04年国土交通省「観光カリスマ百選」に認定。09年4月より現職。2010年10月から、JICA草の根技術協力事業「南房総の『道の駅』の知見を活かした住民参加による地域振興」のプロジェクトリーダーを務める。



2010年1月、「ビンアン道の駅」の落成記念式典に出席し、地元メディアの取材を受ける加藤さん（左）。「地域住民にとっての誇りとなる施設になれる」とエールを送った



千葉県南房総市

ベトナムクアンナム省

ベトナムの国道1号線に「道の駅」がオープン

南北に延びるベトナムの国土を、縦に貫く国道1号線。北部の首都ハノイから、南部の大都市ホーチミンまでバスで約30時間、およそ1800キロの道のりだ。そのほぼ中間にある中部クアンナム省ビンアン村の国道沿いに2010年1月、「ビンアン道の駅」がオープンした。

「今のところは、食堂と休憩施設、ドライバーの仮眠室だけですが、国道1号線は交通量が多く事故が多発しているにもかかわらず、沿線には同様の施設がほとんどないため、集客と交通安全の両面で大きな可能性を秘めています」

そう話すのは、千葉県南房総市の企画部長・加藤文男さん。全国道の駅コンクール「道の駅グランプリ2000」で同市の道の駅「とみうら枇杷倶楽部」を日本一に導いた、初代駅長だ。

そんな道の駅エキスパートの加藤さんに、ベトナムの「ビンアン道の駅」の開設を支援する日本の団体から、アドバイザーとして白羽の矢が立ったのは07年。現地の人々とともに奮闘を続け、見事、約2年かけてオープンすることができた。その後、この道の駅をさらに活性化すべく、今度は南房総市が地域ぐるみで、JICAの草の根技術協力事業「南房総の『道の駅』の知見を生かした住民参加による地域振興」を開始。加藤さんもプロジェクトリーダーとして定期的に現地を訪れ、アドバイスに当たる。道の

道の駅「とみうら枇杷倶楽部」初代駅長 KATO Fumio

加藤文男さん

「とみうら枇杷倶楽部」の特産品コーナー内で、新発売の枇杷ドーナツの出来確かめる加藤さん。枇杷を使った商品はこの地域の名産として、観光客から幅広い人気を誇る



「地元の誇りを感じられる『道の駅』をつくりたい」

地元の名産などを取りそろえ、訪問客に地域の魅力を伝える「道の駅」。千葉県南房総市の道の駅の初代駅長として、地域活性化を支えてきた加藤文男さんが、現在、ベトナムの農村でその経験を伝えている。

第24回

ゲンバの風

